

ショートストーリー 第4話 インフラ編

朝から、窓の外は一面の灰色。雨が横に走っていく。風は家を揺らし、時折、唸り上げるような音が響く。

台風27号……今年に入って何度目の強い台風だろう。最近の雨は短い時間で強く、台風の勢力も落ちにくくなったと、テレビがしゃべっていた。

私は少し遅い朝ご飯を食べる老夫婦と一緒にテレビの前に座り、画面に流れる警報や避難情報をじっと見つめていた。

電気はまだ通じている。水道も問題ない。

だが、前回の台風のとくに使った電池や食料の補充を忘れていたらしく、夫婦は「何が残ってたっけ」「あなた、電池買ってくるって言ってたじゃない」とやり取りを続けている。

私はため息をつきそうになる。

この二人は好きだし、尊敬もしている。けれど時々、こうしてハラハラさせられるのだ。

「ハザードマップ、どこにしまったっけ？」

夫が本棚を探し始めるが、見つからない。

妻は「知らないわよ」と呆れ気味だ。

仕方ない。



私は静かに立ち上がり、本棚とは反対の棚に向かう。

夫が積んだ雑誌の山に手を伸ばすとハザードマップがずるりと出てきた。

「おっ……あった！」

「ほら、また変なところに置いてるじゃない」

夫は苦笑し、妻は軽く怒る。

私は心の中で「まったく」とつぶやきながら、自分の定位置に戻った。

午後になり、風雨が少し弱まった。

その瞬間、家の照明がふっと消えた。
テレビも沈黙する。

停電だ。

豪雨や強風で、電気や水が止まることがあるってことは知っている。
人々は平常時のように暮らせなくなる。

今日もその一例なのだろう。

「少し外も落ち着いてきたし避難しよう」

夫が言い、妻が頷く。

準備が始まった。

薬、タオル、貴重品。

水道はまだ出ていたので、水筒に水を詰める。

そして……私のケージ。

ペットシートも忘れずに。

私はケージに入れられながら、二人の慌ただしい動きを見守った。

この二人は私が守らなければならぬ存在だ。

そう思うと、胸の奥が少し熱くなる。

車に乗り込むと、エアコンの涼しい風が流れた。

まだ風は強いが、雨は小降りになっていて朝よりは路面が見える。

茶色い水が川のように流れていた朝の光景を思い出し、背筋がぞくりとした。

水は嫌だ。

避難所へ向かう道は、ところどころ陥没していた。

斜面が崩れ、土砂が道路に流れ込んでいる場所もある。

夫婦は慎重に車を進め、私はケージの中で揺れに耐えた。いつも車で出かけるときはこんなものだから何でもないと自分を励ます。

やがて、大きな地区センターが見えてきた。

駐車場には避難してきた車が並び、人々が慌ただしく出入りしている。

センターは、薄暗い。玄関の奥にわずかにオレンジ色の明るさがあるだけだった。



「非常灯か？」

「人はたくさんいるようだけど、大丈夫かしら」

車の中で夫婦がつぶやく。

中に入ると、多くの人が避難していた。徒歩で避難したのだろうか、どの人も髪や服が濡れている。

夏の暑さと外の雨でひどい湿気だった。濡れた服においては苦手だ。

高校生くらいの複数の男女が、おにぎりとお茶を配っていた。

どの子も顔に汗を浮かべ、必死だ。

「無理するなよ。暑いから休みやすみだぞ」

先生だろうか、心配そうに声をかけている。

夫婦におにぎりをくれた女の子のポケットから出ていた小さなぬいぐるみがユラユラと私の気持ちをそそったが我慢した。今はそれどころではない。

夫婦は避難の登録を済ませたが、とてもこの暑さと湿気の中では落ち着けないと判断したらしい。

結局、周囲にも車で避難している人がいたので、私たちも車で過ごすことにした。これは、人ごみの中が苦手な私にとっても朗報だった。

再び、エアコンの風に包まれてほっとする。

車の後部座席でケージから出してもらうと、私は自分の黒く艶のあるしなやかな体をゆつくりと伸ばす。ヒゲを整え毛づくろいをする。

長いしっぽは自慢だ。

ふと横を見ると、隣の車から白い犬がハッハッと舌を出しながらこちらを見ている。

お隣さんも大変だね。

心の中でそうつぶやきながら、私は丸くなった。

「スマホの電気もったいないからラジオにしなさいよ」

「スタンドはあいてるのかな……、今晚ずっとエアコンかけっぱなしになりそうだけど……」

夫婦の心配は尽きない。

もうすぐ、また暗闇が来る。

私は、そっと目を閉じた。